

# Burned Animal Bones during the Jomon Period at Goudo Site in Komoro City, Nagano

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Sakurai, Hideo メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00054661">https://doi.org/10.24517/00054661</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 長野県小諸市郷土遺跡にみられる縄文時代の動物焼骨

櫻井 秀雄

(長野県埋蔵文化財センター)

### 1. はじめに

私が発掘調査及び整理作業を担当した長野県小諸市の郷土遺跡については、報告書刊行からすでに20年近い年月がたっている(櫻井2000)。この上信越自動車道建設に伴う発掘調査では、縄文時代中期後中葉から後期初頭にかけての竪穴住居跡107軒等が確認され、浅間山南麓を代表する集落遺跡であることが判明した。また、鱗状短沈線文で特徴的な中期後半の土器群は「郷土式土器」として認識され、浅間山を囲み長野県佐久地域から群馬県西部を中心に分布していることも明らかになっている。

こうした質量ともに豊富な遺構・遺物を有する郷土遺跡のなかで、私が調査時から気になっていたもののひとつに動物焼骨の存在があった。しかしながら、報告書では事実記載にとどまってしまう、報告者として忸怩たる思いが残っている。動物焼骨の存在は郷土遺跡の特徴のひとつであり、さらには中部高地の縄文中後期遺跡の特性を解く手掛かりにもなりうるものである。そこで本稿ではこの動物焼骨について取り上げ、改めて知見をまとめてみたいと思う。

### 2. 郷土遺跡の概要

郷土遺跡は、小諸市甲字中郷土に所在し、浅間山南麓の標高約830mの傾斜面に位置する。

昭和9年に刊行された八幡一郎氏の『北佐久郡の考古学的調査』には、出土遺物とともにその存在がすでに紹介されており、佐久地域でも最も古くから知られている遺跡のひとつといえる。昭和36・40年にはその八幡一郎氏(当時東京教育大学教授)を団長として学術発掘調査が行われ、全国的にも早い時期に敷石住居跡4軒などが発見されたことで「敷石住居の郷土遺跡」として有名となった遺跡でもある。

上信越自動車道建設に伴う発掘調査は、平成4(1992)～7(1995)年度に長野県埋蔵文化財センターが行い、報告書は平成12年(2000年)3月に刊行している。縄文時代早期末～前期初頭の竪穴住居跡6軒・土坑4基、縄文時代中期中葉～後期初頭の竪穴住居跡107軒・土坑462基・屋外埋壘8基・集石3基・掘立柱建物跡1基・土器集中2箇所、後期古墳1基、平安時代の竪穴住居跡2軒・土坑1基、時期不明の土坑659基などが検出されている。

なお、この他にも近接地において小諸市教育委員会



図1 郷土遺跡の位置(長野県小諸市)

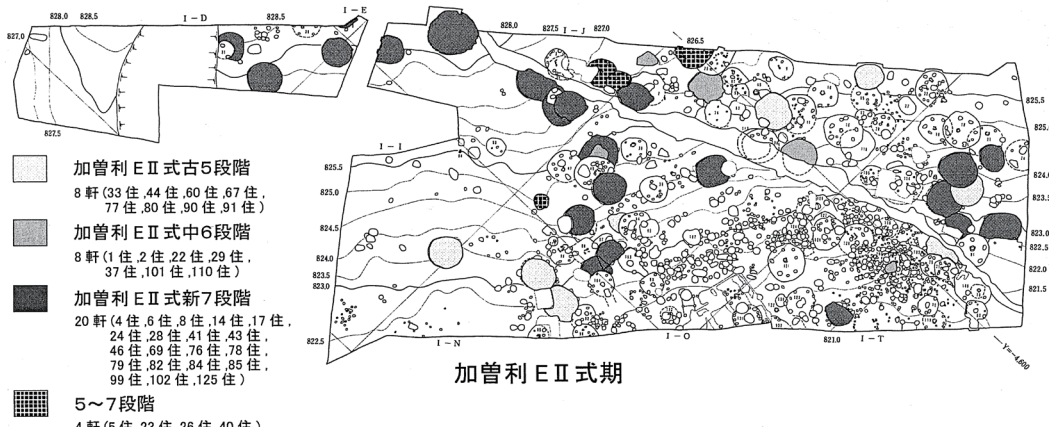
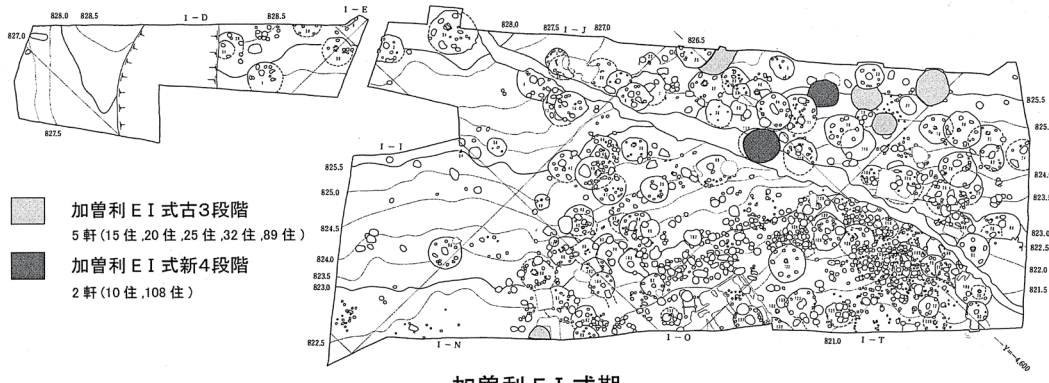
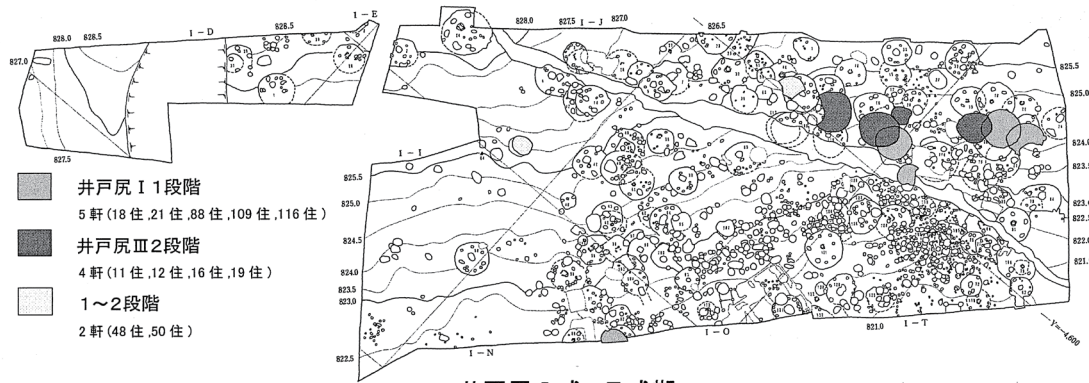
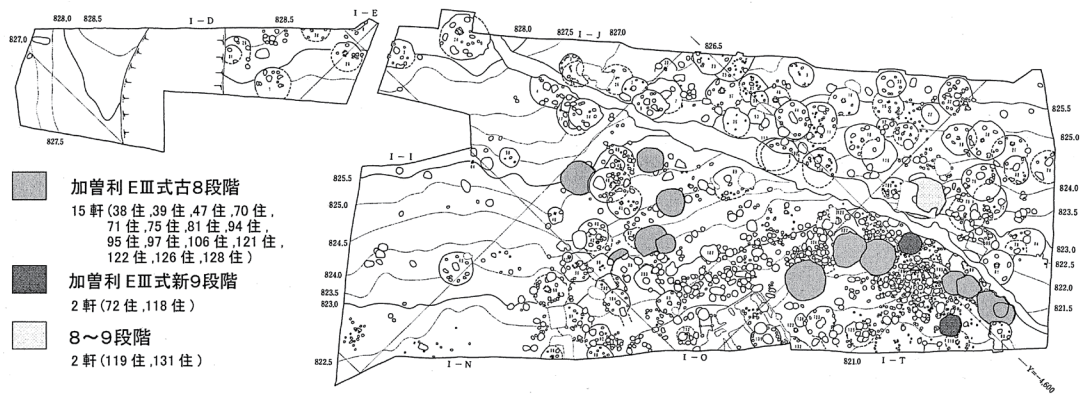
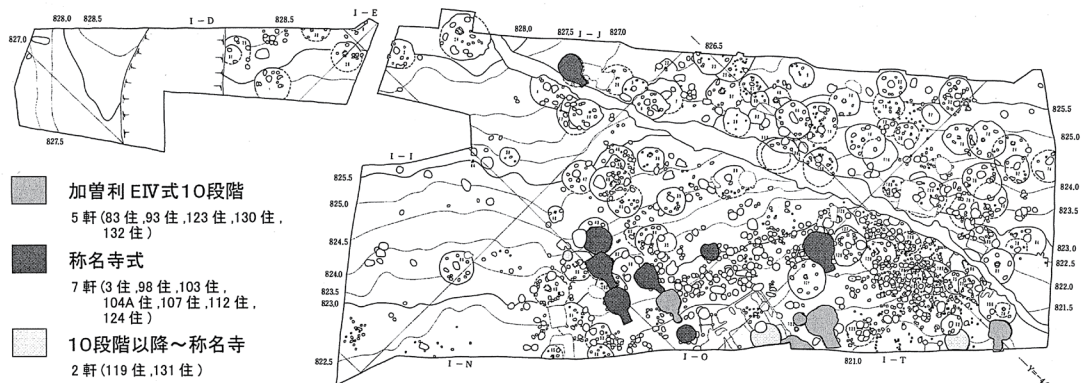


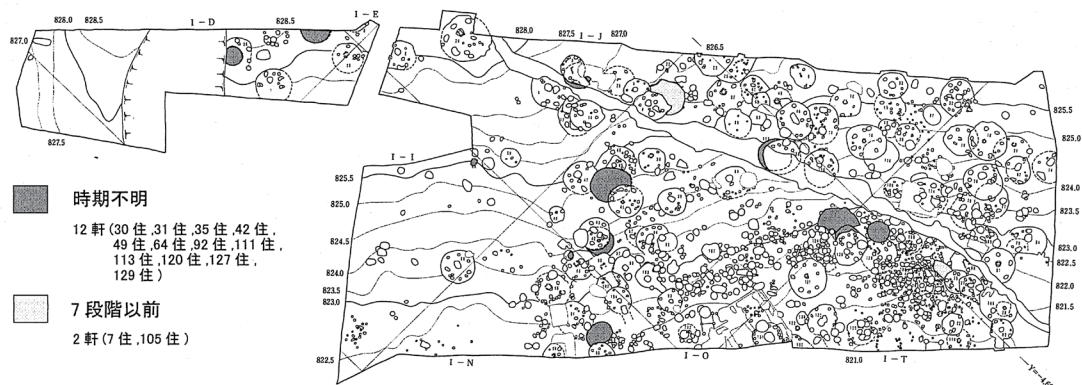
図2 郷土遺跡 住居跡変遷図(1)



加曾利 EⅢ式期



加曾利 EⅣ式~称名寺式期



時期不明・7段階以前

图3 郷土遺跡 住居跡変遷図(2)



図4 動物焼骨を出した土坑・住居跡 (トーンは動物焼骨が出した土坑、★は出土した住居跡を表す)

が平成4・7年度に発掘調査を実施しており、縄文中期中葉～後期前葉の住居跡12軒などが確認されている。

上信越自動車道地点では、縄文時代中期の土器を10段階に時期設定した。1段階は井戸尻Ⅰ式期並行、2段階は井戸尻Ⅲ式期並行、3段階は曾利Ⅰ式・加曾利Ⅰ式古期並行、4段階は加曾利Ⅰ式新期並行、5段階は加曾利Ⅱ式古期並行、6段階は加曾利Ⅱ式中期並行、7段階は加曾利Ⅱ式新期並行、8段階は加曾利Ⅲ式古期並行、9段階は加曾利Ⅲ式新期並行、10段階は加曾利Ⅳ式期並行である。後期は称名寺式、堀之内式、加曾利Ⅱ式の土器が認められている。なお、住居跡の時期別変遷は図2・図3であらわしているが、他にも変遷図では表現できなかった7～10段階にあたる3軒(74号住、96号住、104A号住)がみられる。

集落の変遷については、時期が特定できるものでみると、井戸尻式期(1～2段階)で11軒、加曾利Ⅰ式期(3～4段階)で7軒、加曾利Ⅱ式期(5～7段階)で40軒、加曾利Ⅲ式期で19軒(8～9段階)、加曾利Ⅳ式(10段階)～称名寺式期で14軒を数える。加曾利Ⅱ式期に最盛期を迎えていたことがわかる。集落は後期初頭の称名寺式期並行まで続いている。

### 3 出土した動物骨について

報告書に掲載した骨類の鑑定は、83号住居跡から出土したものについては古墳出土の人骨とあわせて、茂原信生先生(現在京都大学名誉教授)に鑑定をお願いし、その他については、(株)パリオ・サーヴェイを介して金子浩昌氏(当時早稲田大学講師)に依頼した。その鑑定結果・考察は報告書に掲載している。

動物骨のうち被熱のないものは、1125号土坑のシカ角及び1269号土坑のイノシシ上顎骨とグリッド出土2点(獣骨片)のみであり、他はすべて被熱された焼骨である。

動物種としては、イノシシ、ニホンジカ(以下、シカとする。)、ノウサギ、キジがみられる。

このうち、キジは83号住並びにO-23グリッドのみの出土であり、鳥骨としても他に89号住、106号住炉内、123号住及び同炉内で検出されたにすぎない。ノウサギは101号住でイノシシ、シカ角片とともに1点が出

土したのみである。

このようにノウサギやキジ・鳥類はごくわずかな出土にすぎず、イノシシとシカが大多数を占めていることが指摘できる。また、一覧表をみてもわかるとおり、イノシシがその出土量ではシカを圧倒している。ただし、83号住ではシカが16点、イノシシ(あるいはブタ)が5点となっており、シカの方が多くみられている。部位については頭骨と四肢骨がみられた。頭骨では後頭骨、頭頂骨、側頭骨、頬骨、上顎骨、下顎骨などが左右ともにみられ、金子浩昌氏によれば、それも複数個体が想定されるという。四肢骨では肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、寛骨、脛骨が多く、手足根骨、中手もしくは中足骨、指骨などはごく少なかったことや肩甲骨以下の主要骨格もすべて揃うことはなく一部であったことを指摘されている。

茂原信生先生は、83号住居跡出土の動物焼骨について、いずれも白く灰化するまで焼かれて細片化しており、大きなものでも数mmであることを指摘されている。これは他の出土焼骨も同様であった。<sup>1)</sup>

なお、1335号土坑からは、動物焼骨に混じって人骨が1点ではあるが検出されている。これについては後述したい。

### 4. 動物焼骨の出土状況

動物焼骨は、3個所の集中地点と堅穴住居跡、土坑から出土している。動物焼骨集中地点は①(土器集中1及びその周辺土坑)、②101号住居跡及びその周辺土坑、③83号住居跡の3か所に出土は集中しており、この他にも④堅穴住居跡と⑤土坑からも出土をみる。なお、動物焼骨が出土する堅穴住居跡や土坑は、焼骨集中地点を含めた南北約80m、東西約20mの範囲にベルト状に分布していることがわかる。

#### ① 土器集中1及びその周辺土坑からの出土

I-O-23グリッドには、動物焼骨を伴う土器集中と多数の土坑がみられた。

土器集中1は、約3.5×2.5mの範囲に土器片が広がっており、これらに混じってイノシシ焼骨(頸椎骨、後頭骨、上顎骨、鼻骨、切歯骨、頬骨、下顎骨、上腕骨、寛骨、脛骨等)も出土していた。土器集中1は中期10段階に位置づけられるが、ここでは動物焼骨は、土器片とともに散布されたものと理解できる。また、O-23グリッドとしてとりあげた動物焼骨も同様な理

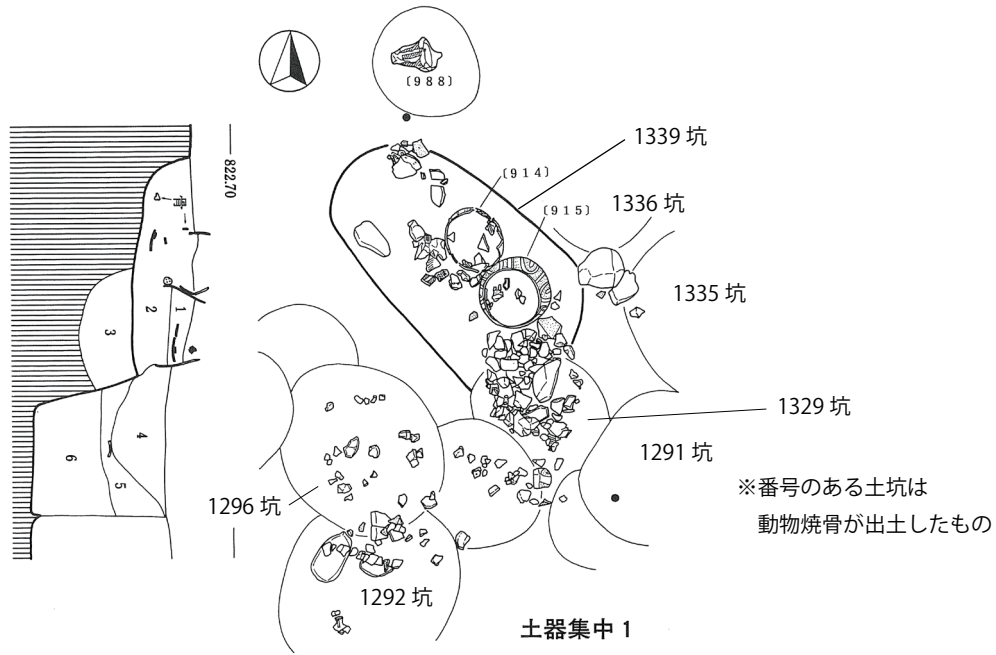


図5 動物焼骨集中地点①  
(土器集中1及びその周辺土坑)

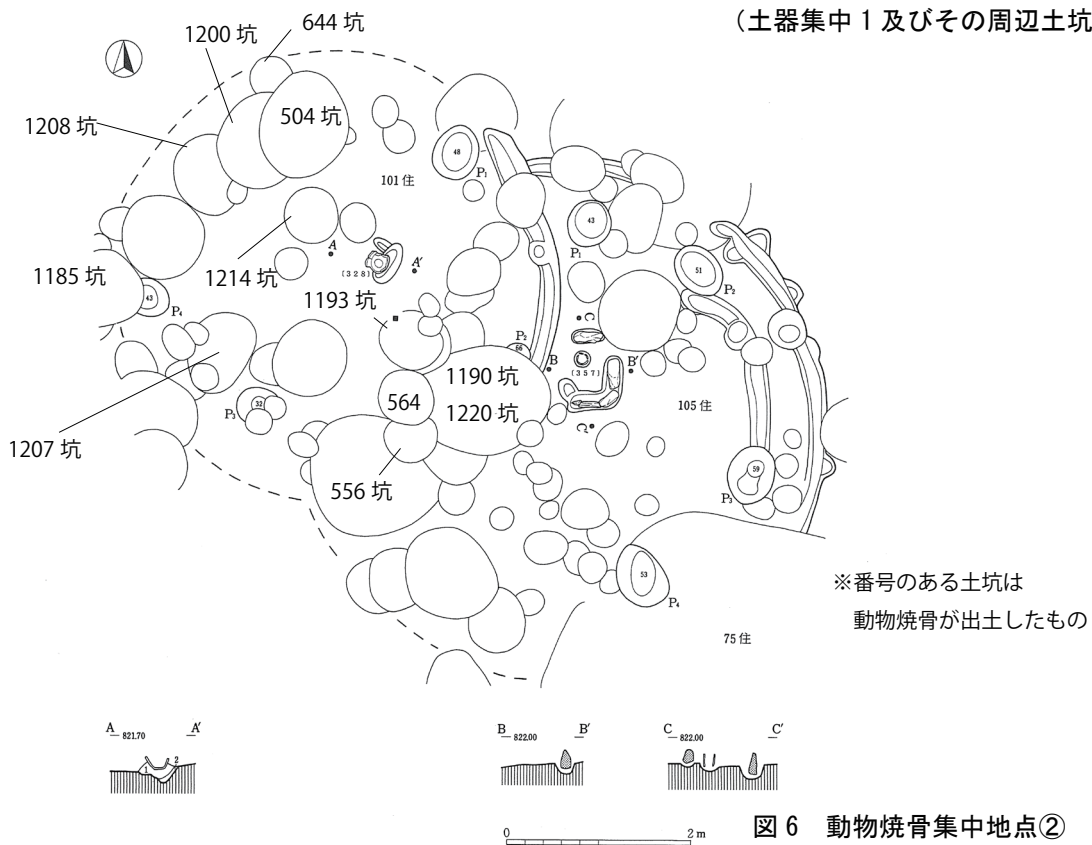


図6 動物焼骨集中地点②  
(101住及びその周辺土坑)

解でよいと考えている。

土器集中1に覆われる土坑のうち、1291号土坑、1292号土坑、1296号土坑、1329号土坑、1335号土坑、1336号土坑、1339号土坑からも動物焼骨の出土をみており、また、近接する1045号土坑、1278号土坑、1321号土坑からも動物焼骨は出土している。これらは8～10段階の土器を伴う土坑であり、土器集中1にみられる動物焼骨と深く関連するものである可能性が高いとみてよいと考えている。

### ② 101号住居跡及びその周辺土坑からの出土

101号住はN-15、O-11グリッドに位置するが、105号住及び多数の土坑と著しく重複し、埋土も東側でわずかに残っていたにすぎなかったため、炉体土器と4ヶの柱穴、それにわずかに残存した東側の壁の存在から住居跡と認定したものである。径5m程度の円形を呈するものとみられる。報告書では、炉体土器の時期をもって中期6段階に位置づけたが、伴出する土器には8段階頃のものも認められるため、住居の廃棄時期は8段階以降とみた方がよいと現在では考えるに至っている。また、重複する多数の土坑との新旧関係はつかめなかったが、土器が出土する土坑のなかでは5～8段階の土器を伴うものが目立っており、最も新しい1190号土坑は8段階以降に位置づけられる。この周辺の動物焼骨の出土は8段階もしくはそれ以降とみてよいかもかもしれない。本跡出土の動物焼骨には、イノシシ・シカ・ノウサギがみられた。なかでもイノシシは下顎骨を主体に出土しており、7個体はあったと推定されている。本跡と重複する土坑のうちでは、504号土坑、556号土坑、564号土坑、644号土坑、1185号土坑、1193号土坑、1200号土坑、1208号土坑、1220号土坑で動物焼骨が出土している。

この101号住居跡及びその周辺土坑から出土する動物焼骨には、意図的に配置された痕跡はみられず、住居内に散布されたと理解できるあり方であった。本跡の床面からは三角柱状土製品が出土していることから、住居廃絶時に動物焼骨の散布を伴う儀礼が行われたものと私は考えている。また、重複する土坑あるいはその周辺にある土坑には、101号住居跡で散布されたものも混じっている可能性があるだろう。

### ③ 83号住居跡からの出土

83号住居跡は、加曾利E IV式期の10段階に位置づけられ、主軸長5.25mをはかる柄鏡形敷石住居跡で

ある。動物焼骨は床面から埋土にかけて出土していた。埋土は単層であり、その中には多量の軽石が含まれている。こうした軽石は本跡廃絶時に意図的に投棄されたものと考えられる。したがって床面から出土した動物焼骨は周辺から流れ込んできたものとは考えにくい。動物焼骨はいずれも白く灰化するまで焼かれており、数mm程度に細片化している。同定できたのは22点であるが、シカ16点・イノシシ5点・キジ頸椎骨1点である。シカは歯や頭蓋骨は認められず、種子骨以外はすべて破片である。幼獣のものも3点がみられる。イノシシ骨は、手根骨1点以外は破片である。他に幼獣の大腿骨頭1点がみられる。動物焼骨は細片が大半であり、床面から埋土にかけて広がっていたことから、私は、本跡では住居廃絶時に動物焼骨を散布（撒く）する儀礼が行われていたと考えたい。こうした動物焼骨の散布儀礼が行われたのちに、軽石を投棄し、住居を廃絶したものと理解できるのではなかろうか。

### ④ 竪穴住居跡からの出土

竪穴住居跡から出土する事例は26軒を数える。このうち炉内のみから検出されたものとしては、69号住、70号住、89号住、90号住、94号住、110号住、

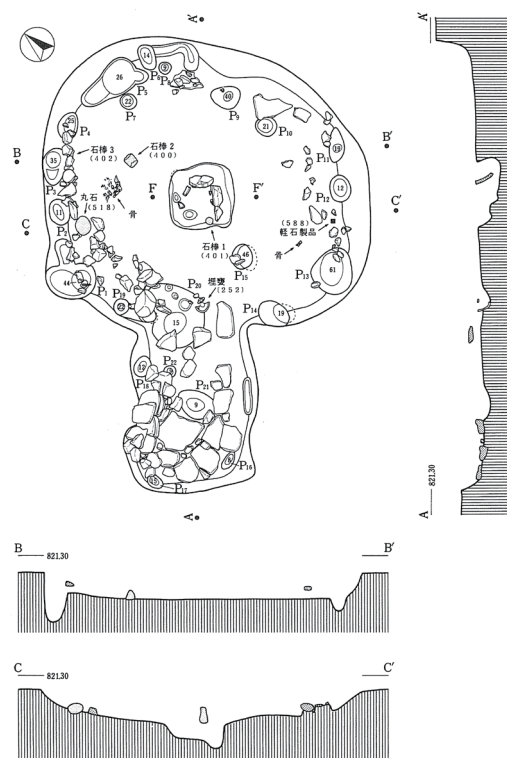


図7 動物焼骨集中地点③  
(83号住居跡)



111号住、118号住の8軒がみられる。こうした竪穴住居跡の炉内から出土したものについては、食料残渣としての性格が濃い面もあり、他の出土パターンのもとの同一に理解すべきか悩むところである。そのため、今回の検討からは除いておくことにする。

これら8軒を除く18軒の住居跡（1号住、39号住、81号住、83号住、97号住、98号住、99号住、101号住、102号住、104A号住、106号住、107号住、121号住、124号住、126号住、123号住、130号住、132号住）のうち、先述した101号住と83号住を除く他の竪穴住居跡は、出土量が少量であったり、動物焼骨を出土する土坑との重複関係にあるものや先述した動物焼骨の集中地点周辺に位置するものが多かったりするため、83号住のように住居における儀礼行為に伴うものというよりも、周辺から流入されたものにとらえた方がよいと理解したい。

#### ⑤ 土坑からの出土

動物焼骨が出土する土坑は73基を数えるが、このうち特記できるものを以下でとりあげてみたい。

##### ○ 1045号土坑

動物焼骨集中地点①の土器集中1の南に近接している。径194×131cmの円形を呈し、深さは94cmをはかる。埋土は4層に分かれ、土器は約1kgを超える量が出土し、他には石器も少なからずみられる。焼骨はイノシシのみであったが、前頭骨2点のほか、側頭骨、上顎骨があり、四肢骨には寛骨、大腿骨、腓骨、基節骨各1点の出土があった。出土状況は、埋土上層部を中心に散在した状態であった。中期10段階。

##### ○ 1125号土坑

調査区南西に位置し、91号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。径104×94cm、深さは40cmをはかる。埋土上層には自然礫や軽石が大量に認められた。埋土中層からはシカの角と獣骨片が出土している。土器・石器の出土も多く、特に土器では4点を図示したが、未図示土器も約7kgをはかる。中期10段階。

##### ○ 1212号土坑

124号住居跡の北に近接し、径86×82cmの円形を呈し、深さは110cmをはかる。動物焼骨は埋土上層からイノシシの側頭骨、鼻骨、寛骨臼部各1点が出土する。土器は破片試料のみである。中期9段階。

##### ○ 1247号土坑

土器集中1の東側に近接する。径188×148cmの

楕円形を呈し、深さは100cmをはかる。埋土は3層に分けられ、3層からイノシシの上顎骨が出土する。他にも獣骨片もみられた。土器の他、打製石斧、磨石、石鏃未製品が出土する。中期10段階。

##### ○ 1248号土坑

土器集中1の東側にあり、1247号土坑に近接する。径196×144cm、深さは92cmをはかる。埋土は5層に分けられ、イノシシの肩甲骨と基節骨が出土しており、いずれも若獣である。他にも獣骨片もみられる。焼骨は上層及び下層からの出土である。土器は破片資料のみ出土であった。中期10段階。

##### ○ 1269号土坑

調査区の南西隅に位置し、規模は径160×148cmの円形を呈し、深さは196cmをはかる。埋土は9層に分かれる。遺物量は極めて多く、図化した5点以外にも約11kgを超える資料がある。石器も相当量である。焼骨としてはイノシシの脛骨、中心足根骨等がみられるが、本土坑最大の特徴として被熱されない上顎骨左右が下層部より認められている。金子氏は「顎骨が焼かれる前の状況を暗示させるような試料である」と指摘している。他には2層及び7層からクリの炭化物が検出されている。中期10段階。

##### ○ 1272号土坑

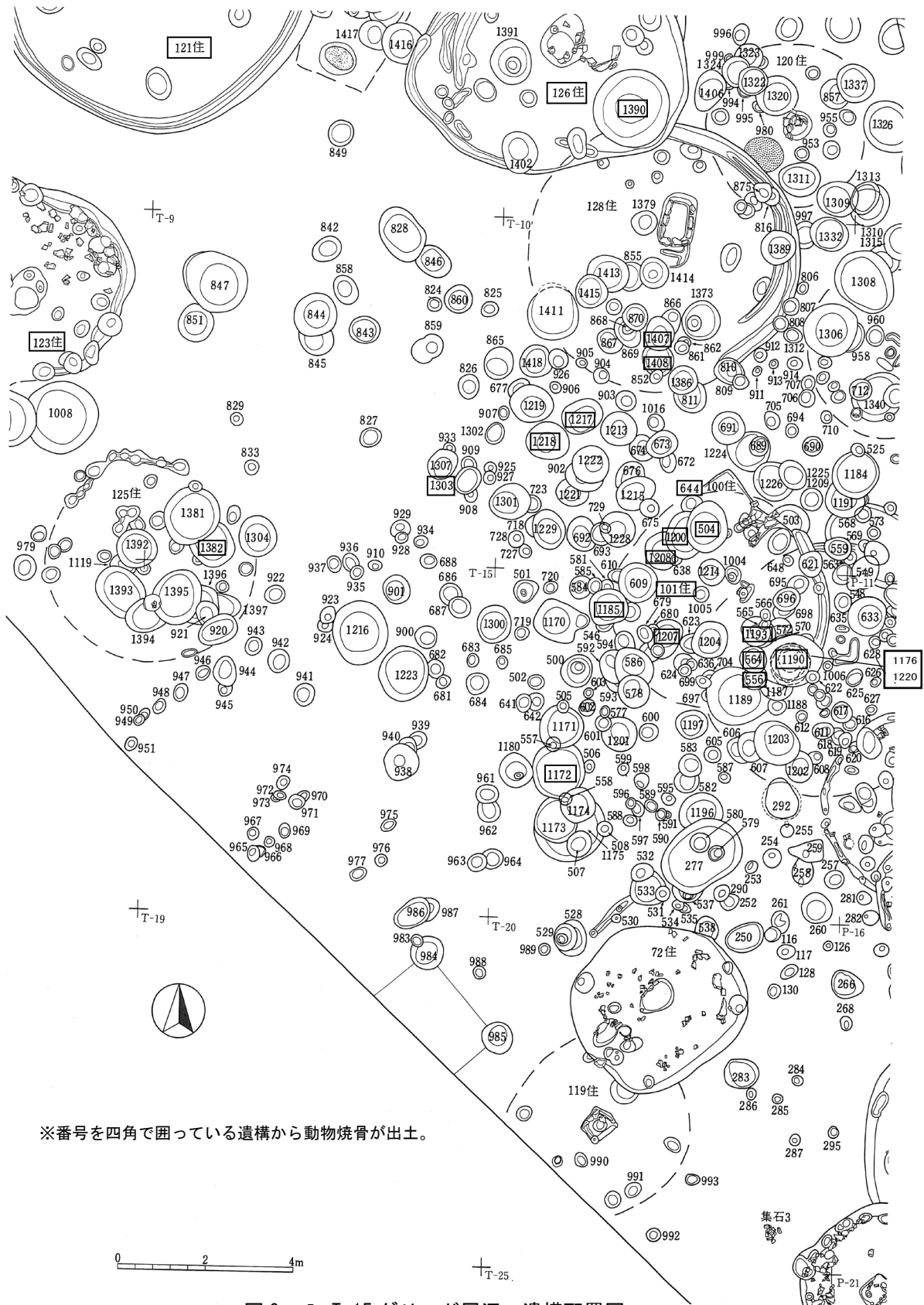
土器集中1の北西側に位置する。径160×100cmの不整な楕円形を呈し、深さは104cmをはかる。埋土は8層に分けられる。中期9段階。土器は3点を図化し、他に打製石斧1点が出土した。クリの炭化物が検出されている。焼骨はイノシシの左右上顎骨と頭蓋底部がみられる。金子氏は「頭蓋の意図的な埋納を推測される」という。

##### ○ 1278号土坑

土器集中1の北西側に近接する。径126×86cmの楕円形を呈し、深さは92cmをはかる。埋土は2層に分けられる。図化した土器は1点であり、石器は台石1点と打製石斧3点が出土している。焼骨は相当量が検出された。成獣3個体分の左右上顎骨と若獣の左右上顎骨1個体分があり、他にも幼獣の左右側頭骨（うち右側<sup>2)</sup>）がみられる。若獣の頬骨、幼獣の下顎骨の一部もある。四肢骨は尺骨・寛骨・大腿骨・脛骨が1～2点みられている。金子氏は「成獣3個体分の左右上顎骨と若獣の左右上顎骨1個体分があり、さらに幼獣の左右側頭骨（うち右側<sup>2)</sup>）がある。若獣の頬骨、



図8 I-0-23 グリッド周辺 遺構配置図



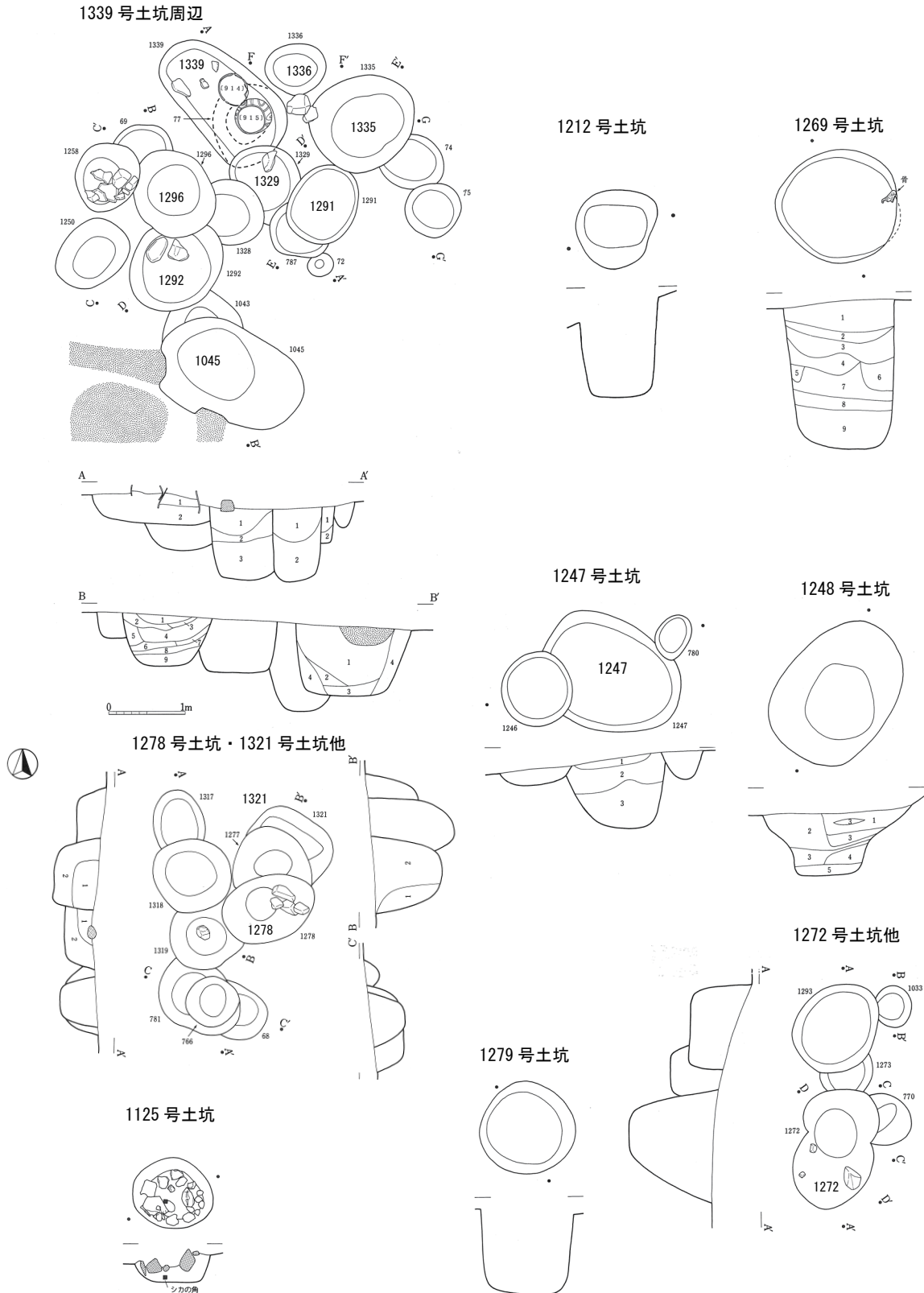


図10 動物焼骨を出土した主な土坑

(数字は土坑番号。重複している場合は動物焼骨を出土していない土坑も含んでいる。)

幼獣の下顎骨の一部もあって、もとはこうした個体の頭蓋が焼かれ、ここに運ばれたのであろう。四肢骨は僅かに尺骨、寛骨、大腿骨、脛骨が1～2点あったのみである。頭骨を主に収めようとした意図があったことが窺える。」と述べている。中期9段階。

#### ○ 1279 号土坑

土器集中1の南東側に位置し、径120×120cmの円形を呈し、深さは114cmをはかる。土器は図示した3点以外にも約8kgが出土した。石器は石鏃1点と打製石斧2点がある。動物焼骨は、イノシシの眼窩後突起部、下顎骨、脛骨が各1点が検出された。他に獣骨片もみられた。中期10段階。

#### ○ 1292 号土坑

O-23グリッドの土器集中1の範囲に一部がかかっており、径133×102cm、深さ80cmをはかる。土器・石器とともに、動物焼骨ではイノシシの側頭頭、上顎骨、頬骨突起、下顎骨、尺骨、寛骨とシカの尺骨、寛骨、大腿骨が出土している。中期8～10段階。

#### ○ 1321 号土坑

O-17・18グリッドに位置し、1277号土坑と重複し半分以上を切られている。先述した1278号土坑に近接している。径110cm程の円形を呈し、深さ70cmをはかる。少量の土器片が出土したのみだが、動物焼骨は、イノシシの前頭骨、頬骨、下顎骨各1点、市篩骨では上腕骨、寛骨、脛骨、中節骨がみられた。寛骨は幼獣のものである。中期8段階の土器片が少量出土したのみである。

#### ○ 1329 号土坑

O-23グリッドの土器集中1に覆われている。重複が激しい箇所であるため、平面プランがはっきりしないが、径100cm程度の円形を呈するとみられ、深さは110cmをはかる。土器・石器（打製石斧・磨石）とともに、動物焼骨ではイノシシの椎骨、頭蓋底部、側頭頭、後頭骨、下顎骨、橈骨、大腿骨が出土している。中期9～10段階。

#### ○ 1335 号土坑

O-23グリッドの土器集中1に西側部分がかかっている。径136×122cmの円形を呈し、深さは122cmをはかる。覆土は単層であり、下部には頭大の軽石礫が数点みられる。約3kgの土器片が出土する。焼骨は多量の出土をみており、イノシシでは軸椎骨1点、頭蓋の後稜、側頭骨、前頭骨、頬骨、涙骨があり、幼・若・

成獣がみられた。上顎骨には右側4点があり、この程度の頭蓋があったものと金子氏は推測されている。下顎骨は左右2点ほどと少ない。四肢骨は肩甲骨（幼体左2点）、上腕骨、寛骨（成獣右2点、左1点）、脛骨があり、シカでは角枝部、下顎骨、橈骨、脛骨がみられるのみであった。中期10段階。

#### ○ 1339 号土坑

O-23グリッドの土器集中1にかかっているが、土器片が散在する箇所であったため、土器集中1の調査段階でも1339号土坑の存在は認識できていた。

径192×100cmの楕円形を呈し、深さ46cmをはかるもので、底部を欠した大形の土器2点が逆位に埋設されていた。埋土及び埋設された土器2ケの内部からイノシシ・シカの焼骨が検出されている。埋土からはイノシシの腰椎骨片と獣骨片が出土している。また埋設された2ケの土器内からも上顎骨（幼獣含む）、切歯骨、下顎骨、尺骨が、シカでも後頭頭、大腿骨、後頭骨、脛骨がみられている。埋設された土器2点については、土坑出土の土器としてはやや特異な出土状態であり、土器集中1と一体をなすものと考えてもよいかもしれない。中期9段階。

以上、主な土坑についてとりあげたが、動物焼骨を出土する土坑は、すでに述べたように動物焼骨集中地点①・②に重複するか、もしくはその周辺にあるものが多く、南北約80m、東西約20mの範囲にベルト状に分布していることが指摘できる。

そして、これらの土坑から出土した動物焼骨については、A. 土器集中1を含むO-23グリッド周辺や101号住居跡で散布されたものが流入したケース、B. 土器・石器等の遺物とともに廃棄されたケース、C. 意識的に埋められたケースの3者があると考えられる。金子氏は、1272号土坑や1278号土坑では頭骨を主に「意図的な埋納」が推測されると報告されている。しかしながら、1272号土坑も1278号土坑も動物焼骨のみを埋めたものとしては規模が大きく、また他の遺物（土器・石器）も散在するような出土状況であった。少なくとも、「埋納」するためにあえて構築されたものではないと私は考える。他の土坑についても、動物焼骨を「埋納」、「埋置」したとみられるものはほとんど見当たらない。唯一可能性があるものとしては、埋土に投棄された軽石の直下からシカ角が出土し

た 1125 号土坑があげられるが、これも埋土中位からの出土であるため、ある程度埋没が進んでいた土坑を利用して埋めたものであった可能性がある。1269 号土坑では被熱されていない上顎骨左右が下層部より認められているが、これらは土器片などとともに出土しており、これも「埋納」、「埋置」されたものとは考えにくい。「埋納・埋置」というよりも「投棄」、「廃棄」されたものとみるべき出土状況であった。

他の土坑でも、破片となった動物焼骨が土器片等とともに埋土に混じった状態で出土していた事例がほとんどであった。調査時の所見では、こうした土坑では検出段階から動物焼骨が出土しているものや 1212 号土坑のように上層から出土するケースが多かったと記憶しているが、その反面、4 層に分けたうちの 1 層と 3 層からの出土をみる 1153 号土坑や最下層からの出土をみる 1247 号土坑、上層から下層まで各層で出土する 1248 号土坑のような出土状況が確認できるのも事実である。

このような出土状況からみると、動物焼骨を出土した土坑の多くは、「埋納」、「埋置」するために構築されたものではなく、すでにあった土坑に「埋められた」ものであったと考えるべきではないだろうか。また、1339 号土坑に埋設された 2 点の土器内からも動物焼骨がみられるが、これも土坑でのありかたと共通するものとみた方がよいかもかもしれない。

ところで、郷土遺跡の調査において検出された土坑は、1125 基に及ぶ。そのうち縄文時代の遺物を出土するものは 462 基であるが、遺物を出土していない土坑のうちでも相当数が縄文時代に所属するものと想定できよう。遺物を出土した 462 基を細分してみると、中期 6 段階以前に比定できる土坑は 40 基程度にとどまるのに対し、7 段階以降に爆発的に増加していくことがみてとれる。7 段階には 20 基程が、8 段階～10 段階ではそれぞれ 50 基程が比定できる。つまり、住居跡数が減少する加曾利 E III 式～E IV 式期に土坑数は増加していくのである。

動物焼骨を出土する土坑も、時期がわかるものでは中期 8 段階以降が多く、そのなかでも中期 10 段階が主体であることが指摘できよう。

## 5 郷土遺跡における動物焼骨のありかた

### (1) 出土状況からみえてくるもの

これまでに見てきたように、郷土遺跡における動物

焼骨の出土は、廃棄された堅穴住居内、遺構外で土器集中などとともにみられる集中地点、土坑内、の 3 つのパターンに分けられるであろう。さらに言えば、堅穴住居内でも散布された状態であるため、①堅穴住居内や遺構外において散布されたものと②土坑内に「埋められた」あるいは「埋まった」状態の 2 者に大別できると考える。つまり、「散布」したものと「埋められた」ものである。

### (2) 散布された焼骨と埋められた焼骨

高山純氏は、配石・敷石遺構から出土する焼骨を検討し、「遺構の内部及びその周囲に一般に焼いて、後に故意にばらまいた」ことを見出した(高山 1976・1977)。郷土遺跡での出土状況でも、土坑出土を除いては、散布(撒く)されたものと理解できる出土状況であった。土坑出土とした焼骨のなかにも、こうした散布されたものが混じっている場合もあるだろう。

一方の「埋められた焼骨」については、土坑の項で指摘したように、焼骨のみを丁寧に「埋納」「埋置」された事例はほとんど見当たらないのが郷土遺跡の特徴であった。ただし、特定の部位などを「埋めた(入れた)」ことは首肯してよいであろう。私は、動物焼骨に対しては「埋納」「埋置」といった丁寧な所作は必要ではなく、「土に埋める(入れる)」という行為そのものが重要であったと考えている。そうした意味では「散布(撒く)」という行為も土の上に落とし、土と一体化させるわけで、広くとらえれば同じ考え方の範疇にあるのかもしれない。

ところで、こうした動物焼骨が、祭祀儀礼の一環であることは首肯してよいであろう。佐藤孝雄氏は、動物に関して何らかの儀礼や祭祀を「動物儀礼」とし、縄文時代でその痕跡として認定される動物遺体の特徴ならびに出土状況について 6 つの事項にまとめている。そのなかには「意図的に焼いた痕跡がある」事項もあり、動物焼骨も動物儀礼としてとらえている。私も同意見である(佐藤 1993)。<sup>2)</sup> なお、以下、動物焼骨を用いた祭祀儀礼を「動物焼骨儀礼」と表現していく。

新津健氏は、「焼く」「埋納(埋置)」「撒く」といった状況は、獣骨を焼き、下顎骨や肩甲骨、それに角といった一部は特定の場に埋納(埋置)し、残った他の部分は更に砕き、集落内に撒くという一連の祭祀行為の中に位置付けられないだろうか。」と論じている(新

津 1985)。

すでに述べたように私は、郷土遺跡では意図的な「埋納」の痕跡はほとんどみられないとみているが、「撒く」ことと同様に「埋納」「埋置」でなくとも「土に埋める」ことが祭祀行為のひとつであることは首肯できるだろう。

ここで想起するのは中世史研究者の網野善彦氏の論である。網野氏は、ある物を「落とす」という行為には、「それによってその物に対する所有者の権利を切り離す」という意味が含まれていたようだ」と述べ、「落とした物」は誰のものでもない無主物となり、いうならば神仏の物となってしまう」ことを指摘する。網野氏はまた、この「落とす」と関連した言葉である「埋める」についても、土の中は異界であり、「土の中に物を埋める行為には、「落とす」と同様に、埋めた物を神仏の物にするという意味がこめられていた」と指摘する。(網野 2012)。網野氏のこうした論は、中世でのありようを指摘したものだが、落としたり埋めたりする行為のなかには、土の中が人間の手を離れた異界であるとの観念が根底にあることは、中世にとどまらず縄文時代にも通じる事象ではないかと考えている。

この観点から郷土遺跡での土坑出土の動物焼骨を考えてみると、重要なのは土の中に「埋める(入れる)」ことであり、したがって丁寧な「埋納」「埋置」は必ずしも必要なく、すでにあった土坑に入れることでも事足りたと理解できよう。さらに言えば、「撒く」行為も同じ観念上にあることも指摘できるのではなかろうか。そしてこの2つの行為は個別に行われたのではなく、組み合わせられて行われた一連の祭祀儀礼であると理解するのが妥当であろう。

以上の見解を私論として提出しておきたい。

### (3) 動物焼骨儀礼の時期

次に動物焼骨儀礼が行われた時期について考えてみたい。先述したように、郷土遺跡における動物焼骨は、中期8段階から10段階に集中している。特に10段階での出土が多いことが指摘できる。

竪穴住居跡の変遷との関係でみると、郷土遺跡で時期が把握できるものでは、中期7段階の20軒をピークとし、中期8段階の15軒、中期9段階で2軒、中期10段階で5軒、後期称名寺式期で7軒と8段階以降は竪穴住居跡数が減少していく。とりわけ、中期9・10段階での減少数が顕著である。つまり、動物焼骨

を用いた祭祀儀礼は、集落が衰退していく段階、言い換えれば集落の最終段階にあたる時期に行われていたことが指摘できるのである。

### (4) 動物焼骨儀礼の目的は何か？

#### ① 主な論者の見解

動物焼骨についてはじめて本格的に検討した高山純氏は、配石・敷石遺構においてみられる焼骨は死者に持たせるために焼き、砕いて撒くものであり、そこにはアイヌの「物送り」に通じる信仰の存在を想定した(高山 1976・1977)。

これに対して新津健氏は、高山氏の「物送り」説を否定し、「火にまつわる祭祀」に伴うものであり、狩猟儀礼にかかわるという性格のひとつを指摘する(新津 1985)。

内山大介氏も、高山氏の物送り儀礼説を否定し、供犠儀礼の痕跡ととられて「葬送の最終儀礼に際して供犠獣の骨と共に死者の一部の骨をも焼き、墓壙に添えたり周辺に散布したりといった過程」を想定する(内山 2005)。そして、この焼骨儀礼の意義としては「災厄などの防除がその目的」とする。

近年では、牧 武尊氏が縄文時代の動物骨を用いた儀礼の目的を検討し、動物焼骨の一部には住居に関連して出土しており、住居の廃棄に関係した儀礼に用いられた可能性を指摘する(牧 2014)。

#### ② まとめ

それでは、郷土遺跡における動物焼骨儀礼の目的は何であるのか。私見を述べてみたい。

郷土遺跡における動物焼骨儀礼を解く大きなカギは集落の最終段階にあたる時期に最も盛んに行われていたという点にあると考えている。この段階に動物焼骨儀礼が行われたということは、遺跡を維持するための様々な社会的・自然的環境が崩れ始めてきたことを示すのではなかろうか。イノシシもシカも縄文人の生業に大きな位置を占めていたことは間違いない。それらの骨を焼いて骨片としたものを撒いたり、土坑に埋めたりする祭祀儀礼を行うことで、そうした社会的・自然的環境の変化から集落を守ろうとしたのではなかろうか。

それではなぜ焼骨なのか。そこには焼くという行為に内包する「火」のもつ呪力に期待したからだとの仮説を提示したい。動物焼骨集中地点のひとつである83号住居跡は、炉に石棒を樹立し、丸石も出土して

いる。私はこうした炉縁石棒は丸石と深い関連性があり、住居廃絶時に行われた「炉の火」の移動の際に行われた祭祀儀礼であると考えている。<sup>3)</sup>

集落の最終段階に近い中期 10 段階のこの住居では、こうした廃絶時の儀礼にさらに動物焼骨儀礼も加わったものと理解したい。堅穴住居数が減少するなかでの住居の廃絶は、集落の衰退に通じるものであったにちがいない。そうしたなかでの住居廃絶時の祭祀儀礼は、前代よりも大がかりなものになったという推測もできようか。

さきにも述べたように、新津健氏は、動物焼骨儀礼を「火にまつわる祭祀」に伴うものであり、狩猟儀礼にかかわるものとしてとらえているが、私も火との深い関連性を指摘するものである（新津 1985）。またイノシシとシカが縄文時代の主要な狩猟対象動物であることから狩猟儀礼にかかわるものであるとの論にも異議はない。ただし、私は狩猟を含む生業全体にかかわる儀礼でもと考えている。郷土遺跡では集落が衰退してくる中期 10 段階前後には社会的・自然的環境を揺るがす生業の危機にみまわれたことが動物焼骨儀礼の背景にあったのではないかと推測するものである。

## (5) 今後の課題

### ①幼獣の存在

金子氏は、郷土遺跡の報告の中でイノシシについては、判明できる範囲で1歳未満の幼獣、若獣、成獣の区別をされているが、「幼体、成獣の区別無く同じように扱われていることが推測される」と述べている。金子氏はまた、山梨県金生遺跡での事例から、幼獣は食用とされていなかった可能性を指摘し、シカについても貝塚などからの出土例の検討から幼獣のものがきわめて稀で、2～3才位の亜成獣が最も多く、幼獣は狩猟の際に意識的に避けることがあったのかもしれないと述べている（金子 1994）。

西本豊弘氏は、縄文時代のシカ・イノシシ狩猟に人間による狩猟圧が年齢構成にあらわれたとする小池裕子氏・林良博氏・大泰司紀之氏の論を紹介するが、自身が集成した資料からすれば、狩猟圧が加えられていたことはなかったと推測している（西本 1991）。

ところで、民俗学者の早川孝太郎氏によれば、「オトシアナは猪を防ぐために設けたのであったが、一方それで猪を捕る狩人もあった。（中略）老人の話によ

ると、同じ狩人の中でも腕に自慢の者がやることではなかった。捕れた獲物も多くは子猪ばかりで、親猪は滅多にかからなんだと言う。」とのことである（早川 1974）。

また、牛沢百合子氏によれば、捕獲したとしても、イノシシの幼獣は食べなかったものということであり、捕獲と食用は分けて考えるべきだと指摘している（牛沢 1978）。

幼獣は成獣と異なる扱いを受けていた可能性があろう。動物焼骨のうち、幼獣が占める割合を出すには骨片から個体数をどのように算出するかなど分析資料のカウントなどにおいて統計学的にも適正な作業手続きが必要であるため、容易な結論は出せないが、郷土遺跡における動物焼骨儀礼が集落の最終段階に行われていたことからすれば、イノシシやシカの捕獲数が減少し、幼獣まで捕獲・食用にせざるをえない状況にあった可能性や、幼獣をあえて選んで焼骨儀礼に用いた可能性も否定はできないと考えている。今回はこうした可能性の存在を提示するにとどめるが、今後の課題のひとつである。

### ②人骨について

先述したように 1335 号土坑からは、ヒトの下顎骨片が1点のみだが出土している。金子氏によれば、萌出直前の切歯をもち7才位のものだという。このヒトの骨をどう理解するべきであろうか。動物焼骨とヒトの焼骨が共伴する事例は少なくなく、阿部友寿氏は、縄文時代中期以降の東北地方南部から中部高地を中心に、獣骨や人骨が焼けた状態で共伴する事例を集成し、焼獣骨との共伴がヒトの埋葬時の最終段階もしくは再葬に際して生じていることから、動物と同一視される被葬者像を指摘している（阿部 2017）。郷土遺跡から出土した1点のヒトの焼骨もこうした見解と同一に考えるべきか悩むところである。

私は、7才位の年少者の骨であることに注目したい。民俗事例においては、「七歳までは神の内」といわれるように成人とは異なる扱いをしていたことが知られ、また平安時代においては、幼児は風葬（遺棄）するのが当時の一般的風習であったことが指摘されている（櫻井 2017）。江戸時代においても、7才までは幼児であり、死んでも本葬式は出さないことが多かったという（木村 1980）。もちろん、こうした観念が縄文時代にまで適応できるかは慎重な検討が必要ではある



が、逆に言えば、こうした観念の存在を前提とした仮説の提示があってよいのではなかろうか。

今回は、こうした観念の存在を仮説とした上で、さらに出土数が1点のみという僅少さから、人骨との共伴事例として強調することはしなかったが、違う角度からの検討も今後は行っていく必要はあるだろう。

### ③他遺跡との比較検討

動物焼骨の出土で古くから知られる遺跡は少なく、代表的なものとして、埼玉県富士見市の正網遺跡（鈴木他 1989）、東京都町田市なすな原遺跡（なすな原遺跡調査団 1984）、群馬県桐生市の千網戸遺跡（桐生市教委 1978）、福島県大熊町の道平遺跡（大竹 1983）などがあげられる。

長野県内でも古くから動物焼骨が出土する遺跡の調査が行われてきている。松本市（旧四賀村）の井刈遺跡では縄文時代後期の配石遺構から獣骨が出土し（大場他 1963）、坂城町込山 C 遺跡では縄文時代中期末の立石をもつ敷石遺構の埋設土器から獣骨が出土している（金子他 1964）。この他、戸倉町の幅田遺跡や円光坊遺跡からも動物焼骨の出土をみている（屋代高校 1964・金子他 1965、戸倉町教委 1990）。これらには人骨と共伴する事例が多いことも確かである。

郷土遺跡の調査時期に相前後しては、近隣の御代田町や上田市で動物焼骨の出土をみる遺跡の発見があった。御代田町の滝沢遺跡では、後期堀之内式期の D-30 土坑で生人骨・焼人骨とともに動物焼骨が出土している。これについては二次葬に伴う犠牲獣である可能性を報告者の小山岳夫氏は指摘するが、郷土遺跡にはみられないパターンである（小山 1997）。

上田市（旧真田町）の四日市遺跡Ⅱでは、縄文時代中期末葉の3軒の住居跡からイノシシやシカの焼骨が出土している。住居跡出土という点では郷土遺跡と通じるが、このうち98号住居跡からはヒトの頭蓋骨の一部も検出されていることが異なる要素である（和根崎 1996）。

今回はこうした遺跡との比較検討はできなかった。これについても今後の課題としたい。

### (6) おわりに

郷土遺跡は、私をはじめ調査担当者として携わった遺跡であるが、報告書においてこの内容の濃い遺跡のもつ情報をどれだけ記録に残すことができたのか心許なく感じるところも多く、調査担当者としての責務

を果たさなければとの思いを抱いてきている。そのため機会があるごとに郷土遺跡について小文を草してきた（櫻井 1996、2002、2011、2012、2016）。報告書刊行から20年近い時間が過ぎてしまったが、ここに郷土遺跡の動物焼骨についての整理・考察を改めて行い、ようやく私見を提示することができた。

動物焼骨儀礼については今後もさらなる考察を行っていきたく考えている。

### 註

- 1) 報告書の83号住の項では「人骨」の出土との記述となっているが、これは「動物焼骨」の誤りである。お詫びして訂正しておきたい。
- 2) 佐藤氏が指摘するその他の5事項は以下のとおりである。①配置の痕跡が認められる。②特定の部位骨だけが集中的に検出されている。③とくに頭骨などに非実利的と思われる加工痕が認められる。④何らかの施設に安置・収納されている。⑤祭祀用具と考えられる何らかの遺物と共伴している。
- 3) これについての考察は「炉址に石棒の家」と題した拙稿を山麓考古同好会の『雑木林』に投稿中である。

### 引用参考文献

- 阿部友寿 2017 「獣骨と人骨の焼骨共伴例」『考古学研究』253号
- 網野善彦 2012 『歴史を考えるヒント』新潮文庫
- 井上洋一 1990 「イノシシからシカへ」『國學院大學考古学資料館紀要』6輯
- 牛沢百合子 1978 「シカとイノシシが食肉の主流」『科学朝日』55号
- 内山大介 2005 「先史時代の葬送と供犠」『信濃』57巻9号
- 大竹憲治 1983 「縄文時代における動物祭祀遺構に関する二つの様相」『道平遺跡の研究』福島県大熊町教育委員会
- 大塚和義 1988 「縄文の狩猟儀礼」『古代史復元2 縄文人の生活と文化』講談社
- 大場磐雄・永峯光一・原嘉藤 1963 「長野県東筑摩郡四賀村井刈遺跡調査概報」『信濃』15巻12号、信濃史学会
- 金子浩昌・山崎元・森島稔 1964 「長野県埴科郡坂城町込山 C 遺跡略報」『信濃』16巻12号
- 金子浩昌 1994 「狩猟対象と技術」『縄文文化の研究2』雄山閣
- 金子浩昌 1965 「長野県埴科郡中田遺跡調査報告・その2」『長野県考古学会誌』2号
- 金子浩昌 1994 「狩猟」『縄文文化の研究2』雄山閣

- 金子浩昌 2000 「長野県小諸市郷土遺跡出土の脊椎動物遺体」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 19 - 小諸市内 3 - 郷土遺跡・三田原遺跡・岩下遺跡ほか』長野県埋蔵文化財センター
- 桐生市教育委員会 1978 『千網谷戸遺跡発掘調査報告』
- 木村礎 1980 『近世の村』教育社
- 小山岳夫 1997 『滝沢遺跡』御代田町教育委員会
- 櫻井秀雄 1996 「埋葬の用途・機能をめぐる素描—研究史を振り返って—」『長野県埋蔵文化財センター紀要 4 号』長野県埋蔵文化財センター
- 櫻井秀雄 2000 「郷土遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 19 - 小諸市内 3 - 郷土遺跡・三田原遺跡・岩下遺跡ほか』長野県埋蔵文化財センター
- 櫻井秀雄 2002 「戸尻Ⅲ式の土器を埋設する土坑について」『長野県埋蔵文化財センター紀要 9 号』長野県埋蔵文化財センター
- 櫻井秀雄 2011 「郷土式土器—その提唱までの経緯—」『佐久考古通信 No107 特集 郷土式土器は成立するか—』佐久考古学会
- 櫻井秀雄 2012 「東信地域における縄文中期の様相」『長野県考古学会誌』143・144 合併号
- 櫻井秀雄 2016 「佐久の縄文中期」『佐久考古通信 No114—特集：佐久の縄文時代—』佐久考古学会
- 櫻井秀雄 2017 「靈魂封じ込めの場としての古墳」『信濃』69 巻 7 号、信濃史学会
- 佐藤孝雄 1993 「動物儀礼の「復元」と民族誌の利用」『新視点 日本の歴史 第一巻』新人物往来社
- 茂原信生 2000 「郷土遺跡出土の人骨（古墳時代）と脊椎動物遺存体（縄文時代）」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 19 - 小諸市内 3 - 郷土遺跡・三田原遺跡・岩下遺跡ほか』長野県埋蔵文化財センター
- 末木健 1983 「土器廃棄と信仰」『歴史公論』9 号、雄山閣
- 鈴木加津子・鈴木正博・荒井幹夫・金子浩昌 1989 「正網遺跡」『研究紀要』5 号、富士見市遺跡調査会
- 高山純 1976・1977 「配石遺構に伴出する焼けた骨類の有する意義（上）（下）」『史學』47 巻 4 号・48 巻 1 号、三田史学会
- 千葉徳爾 1995 「日本人が考えた動物霊」『国立歴史民俗博物館研究報告』61 集
- 土肥孝 1984 「狩猟儀礼から農耕儀礼へ」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所
- 戸倉町教育委員会 1990 『円光坊遺跡』
- なすな原遺跡調査団 1984 『なすな原遺跡—No1 地区調査』
- 西本豊弘 1983 「縄文時代の動物と儀礼」『歴史公論』9 号、雄山閣
- 西本豊弘 1991 「縄文時代のシカ・イノシシ狩猟」『古代』91 号、早稲田大学考古学会
- 西本豊弘 1995 「縄文人と弥生人の動物観」『国立歴史民俗博物館研究報告』61 集
- 西本豊弘・松井章編著 1999 『考古学と動物学』同成社
- 丹羽百合子 1994 「解体・分配・調理」『縄文文化の研究 2』雄山閣
- 新津健 1985 「縄文時代後晩期における焼けた焼骨」『日本史の黎明—八幡一郎先生頌寿記念論文集』
- 早川孝太郎 1974 「猪・鹿・狸」『早川孝太郎全集第四巻』未来社
- 牧武尊 2014 「縄文時代の動物骨を用いた儀礼」『筑波大学史・考古学研究』25 号
- 屋代高校地歴班 1964 「埴科郡福田遺跡第一次調査」『長野県考古学会誌』創刊号
- 山梨県埋蔵文化財センター 1989 『金生遺跡Ⅱ』
- 和根崎剛 1996 『四日市遺跡Ⅱ』真田町教育委員会

謝辞：

藤井純夫先生が定年退職を迎えられたことをお祝い申し上げます。藤井先生が着任された時にはすでに私は卒業してしまいましたので、直接講義を受ける機会はありませんでしたが、金大考古学大会などで私の発表に対してアドバイスをいただいております。また、平成 18 年 11 月の考古学研究室の旅行では、当センターで調査していました佐久市の西近津遺跡群と周防畑遺跡群にお越しいただき、私のご案内させていただきました。その際、「周防畑」を「すおうばた」ではなく、「すぼうばた」と読むことに興味をもたれたことが記憶に残っています。確かに不思議な読み方であり、それを契機に私もその語源について調べていますが、近隣に位置する諏訪系の近津神社に関連するのではないかと推測しているところです。また、今回取り上げました郷土遺跡は「ごうど」と読みますが、これも興味深い地名です。遺跡名となる地名についても地域研究の一環として取り組んで行きたいと思っています。

最後に、本稿を草するにあたっては、茂原信生先生、櫻井秀雄先生（独協医科大学）、本郷一美先生（総合研究大学院大学）にご教示をいただきました。常日頃からのご指導とあわせて御礼を申し上げます。

表 1 郷土遺跡出土の動物骨一覧

出土遺構	グリッド	イノシシ	シカ	イノシシ or シカ	その他	時期	鑑定者
39 住	O-7 他				骨片 2.13 g	8 段階	未鑑定
69 住炉内	O-13 他			獣骨片		7 段階	金子
70 住	P-16				骨片 3.4 g	8 段階	未鑑定
81 住	P-11 ~ 17			獣骨片		8 段階	金子
83 住 - 鑑定 1	T-20・25 P-18・21			獣骨片	キジ頸椎骨 1	10 段階	金子
83 住 - 鑑定 2		頭蓋骨 1 肩甲骨 1 手根骨 1 大腿骨 1 (幼獣) 脛骨 1	椎骨 1 上腕骨 1 (幼獣) 寛 骨 3 大腿骨 1 (幼獣) 脛骨 3 (幼獣) 1 足根骨 5、指 骨 2			10 段階	茂原
89 住炉内	N-13・14			獣骨片		3 段階	金子
90 住炉内	N-9 他		中手 / 中足骨 1	獣骨片		5 段階	金子
91 住	N-14・15				骨片 2.02 g	5 段階	未鑑定
94 住炉内	O-11・12			獣骨片		8 段階	金子
97 住	O-11			獣骨片		8 段階	金子
98 住	O-6 他			獣骨片		称名寺	金子
99 住	O-11	肋骨 1	角片 1	イノシシ		7 段階	金子
101 住	N-15 O-11	下顎骨 21 切歯骨 1 後頭顆 1 肋骨片 1 脛骨 1			ノウサギ脛 骨 1	6 段階	金子
102 住	N-15 他			橈骨 2		7 段階	金子
104A・B 住	O-16 他			獣骨片		称名寺	金子
106 住	P-16			獣骨片		8 段階	金子
106 住炉内	P-16	肋骨 1 (幼獣?)			鳥骨?	8 段階	金子
107 住	O-17・18		角片 1 尺骨 1			称名寺	金子
110 住	O-20 他	歯? (11.39g)				不明	未鑑定
110 住炉内	O-20 他	中間手根骨 1				6 段階	金子
111 住炉内	N-10	下顎骨 1 肩甲骨 1		獣骨片		不明	金子
118 住炉内	P-6	大腿骨 1				9 段階	金子
121 住	O-23 他			獣骨片		8 段階	金子
123 住	T-3・8			獣骨片	鳥骨片 1	10 段階	金子
123 住炉内	T-3・8			獣骨片	鳥骨片 2	10 段階	金子
123 住ピッ ト	T-3・8	橈骨 4 中手骨 3				10 段階	金子
124 住	O-24 他			獣骨片		称名寺	金子
126 住	T-4 他	頸椎骨 1	肋骨 1 中間手根骨 2 角片	シカ		8 段階	金子
130 住	T-3	基節骨 1		獣骨片		10 段階	金子
132 住	T-2 他				骨片 8.6 g	10 段階	未鑑定
504 坑	T-10	上腕骨 1 (幼獣) 大腿骨 1				8 段階	金子
556 坑	T-15			獣骨片		5 ~ 7	金子
564 坑	T-15			獣骨片		不明	金子
644 坑	T-15	〈イノシシ/シカ〉後頭顆 1 肋骨 1				不明	金子
765 坑	O-17	上腕骨片? 1				10 段階	金子
784 坑	O-17	後頭骨 1 上顎骨 1 大腿骨 1 脛骨 1				9 段階	金子
837 坑	O-24	切歯骨 1 下顎骨 1	末節骨 1 中足骨 1			不明	金子
905 坑	T-10			獣骨片		不明	金子

表2 郷土遺跡出土の動物骨一覧

出土遺構	グリッド	イノシシ	シカ	イノシシ or シカ	その他	時期	鑑定者
1045 坑	O-23	前頭骨 1 側頭骨 1 上顎骨 2 寛骨 1 大腿骨 1 基節骨 1 腓骨 1 四肢骨片 4				10 段階	金子
1072 坑	T-2	尺骨 1		獣骨片		10 段階	金子
1120 坑	N-9			獣骨片		10 段階	金子
1121 坑	N-10		角片 1	獣骨片		5 段階	金子
1124 坑	N-15			獣骨片		10 段階	金子
1125 坑	N-15		角 1 (被熱なし)	獣骨片		10 段階	未鑑定
1126 坑	N-14・15		角 1	獣骨片		10 段階	金子
1127 坑	N-14・15	足根骨 1				10 段階	金子
1133 坑	O-12			獣骨片		8 段階	金子
1140 坑	O-12	中節骨 1		獣骨片		8 段階	金子
1153 坑	O-11			獣骨片		称名寺	金子
1155 坑	N-15			獣骨片		不明	金子
1172 坑	T-15			獣骨片		8 段階	金子
1176 坑	T-15	尺骨 1		獣骨片		8 段階	金子
1185 坑	T-15			獣骨片		不明	金子
1190 坑	T-15	下顎骨 1 (若獣)		獣骨片		8 以降	金子
1193 坑	T-15	頬骨? 1				5~7	金子
1200 坑	T-10	上顎骨 1 肩甲骨 1 尺骨 1 (若獣)				5~7	金子
1207 坑	T-10	口蓋骨 2 口蓋骨片				不明	金子
1208 坑	T-10	肋骨 1 脛骨 1		獣骨片		不明	金子
1212 坑	O-24	側頭骨 1 鼻骨 1 寛骨 1 恥 骨 1				9 段階	金子
1214 坑	T-15	涙骨片 1		獣骨片		不明	金子
1217 坑	T-10	下顎骨 1		獣骨片		不明	金子
1218 坑	T-10	中手骨 1		獣骨片		不明	金子
1220 坑	T-15				骨片 8.4 g	7 段階	未鑑定
1235 坑	O-19			獣骨片		10 段階	金子
1241 坑	O-18			獣骨片		8 段階	金子
1244 坑	O-24			獣骨片		10 段階	金子
1247 坑	O-23	上顎骨 1		獣骨片		10 段階	金子
1248 坑	O-18・19	肩甲骨 1 (若獣) 基節骨 1 (若獣)		獣骨片		10 段階	金子
1251 坑	O-22				骨片 11.3 g	10 段階	未鑑定
1253 坑	O-17・22	口蓋骨 1 切歯骨 1 肩甲骨 1 (若獣)		獣骨片		9 段階	金子
1254 坑	O-22			獣骨片		5~7	金子
1260 坑	O-17				骨片 3.54 g	5 段階	未鑑定
1267 坑	O-21			獣骨片		不明	金子
1269 坑	O-21	鋤骨 1 上顎骨 (被熱なし) 切歯骨 1 (摩耗痕なし) 頬 骨 1 (若獣) 脛骨 1 (幼獣) 足根骨 1		イノシシ (頭蓋骨 片)		10 段階	金子

表3 郷土遺跡出土の動物骨一覧

出土遺構	グリッド	イノシシ	シカ	イノシシ or シカ	その他	時期	鑑定者
1272 坑	O-17	頭骨底部片 1 上顎骨 2 頸 動脈突起片 1				9 段階	金子
1278 坑	O-22	後頭顆 1 前頭骨 2 (若獣 1) 側頭骨 2 (幼獣) 鼻骨 3 (幼 獣 1) 涙骨 1 (幼獣) 上顎 骨 11 (若獣 1) 切歯骨 2 口蓋骨 17 頬骨 4 (若獣 2) 下顎骨 3 (幼獣) 尺骨 1 寛 骨 1 大腿骨 1 脛骨 2 足根 骨 1	鼻骨 1 (幼獣) 橈骨 1 中手 骨 1 寛骨 1			9 段階	金子
1279 坑	O-23	眼窩後突起 1 下顎骨 1 脛 骨 1		獣骨片		10 段階	金子
1280 坑	O-17			獣骨片		8 段階	金子
1290 坑	O-12・17	四肢骨片 1				10 段階	金子
1291 坑	O-23			獣骨片		10 段階	金子
1292 坑	O-22・23	側頭骨 1 上顎骨 1 頬骨 1 下顎骨 1 尺骨 1 寛骨 1	尺骨 1 寛骨 1 大腿骨 1			8～10	金子
1294 坑	O-18				骨片 2.2 g	10 段階	未鑑定
1296 坑	O-22・23			獣骨片		10 段階	金子
1303 坑	T-9			獣骨片		不明	金子
1308 坑	T-10 他			獣骨片		9 段階	金子
1321 坑	O-17・18	前頭骨 1 下顎骨 1 頬骨 1 上腕骨 1 寛骨 1 (幼獣) 脛 骨 2 中節骨 1		獣骨片		8 段階	金子
1329 坑	O-23	椎骨 2 頭蓋骨底部 1 側頭 骨 1 後頭顆 1 下顎骨片 1 橈骨 1 大腿骨 1				9～10	金子
1330 坑	T-5	肋骨 1		獣骨片		10 段階	金子
1335 坑	O-23	軸椎骨 1 後稜骨 2 (若獣・ 幼獣) 側頭骨 1 (幼獣) 前 頭骨 3 (若獣 2) 鼻骨 1 涙 骨 2 上顎骨 8 切歯骨 1 頬 骨 1 下顎骨 6 肩甲骨 2 (幼 獣) 寛骨 3 脛骨 1	角片 1 下顎骨 1 橈骨 1 脛 骨 3			10 段階	金子
1336 坑	O-23	頬骨片 1		獣骨片		10 段階	金子
1339 坑	O-23	腰椎骨片 1		獣骨片		9 段階	金子
1339 坑 (土 器 915 内)	O-23	上顎骨 2 (幼獣 1) 切歯骨 1	後頭顆 1 大腿骨 1			9 段階	金子
1339 坑 (土 器 914 内)	O-23	上顎骨 1 下顎骨 1 尺骨 1	後頭骨 1 脛骨 1	獣骨片		9 段階	金子
1341 坑	O-18			獣骨片		不明	金子
1343 坑	O-17・18			獣骨片		9 段階	金子
1362 坑	O-22・23		角片 1			8 段階	金子
1363 坑	O-24		中手骨 1			7 段階	金子
1365 坑	O-24	中節骨 1		獣骨片		10 段階	金子
1366 坑	O-24	大腿骨 1 手根骨 1				10 段階	金子
1372 坑	T-4			獣骨片		8～10	金子
1382 坑	T-9			獣骨片		不明	金子
1390 坑	T-5				骨片 47 g	10 段階	未鑑定
1404 坑	T-4			獣骨片		不明	金子

表 4 郷土遺跡出土の動物骨一覧

出土遺構	グリッド	イノシシ	シカ	イノシシ or シカ	その他	時期	鑑定者
土器集中 1	O-23	頸椎骨 1 後頭骨 2 鼻骨 1 上顎骨 1 切歯骨 1 頬骨 1 下顎骨 2 後関節突起骨 1 上腕骨 4 寛骨 2 脛骨 1				10 段階	金子
屋外埋甕 4 掘方	O-4			獣骨片		6 段階	金子
O-23		前頭骨 1 上顎骨 6 下顎骨 1 上腕骨 8 (幼獣 2) 橈骨 2 胸椎骨 1 大腿骨 1 頸椎 骨 2 腰椎骨 1 側頭骨 3 経 静脈突起 1 尺骨 1 肩甲骨 1 脛骨 2		獣骨片 (頭骨・ 肩甲骨・ 椎体骨含 む)	キジ尺骨 1		金子
T-15		上顎骨 1					金子
N グリッド				獣骨片 (被熱な し)			金子
P グリッド				獣骨片 (被熱な し)			金子
T グリッド			脛骨 1				金子
不明その他			基部骨 前頭骨片	獣骨片			金子

※「被熱なし」としたものの以外は焼骨

※2 表の時期については、5 段階：加曾利 E II 式古期並行、6 段階：加曾利 E II 式中期並行、7 段階：加曾利 E II 式新期並行、8 段階：加曾利 E III 式古期並行、9 段階：加曾利 E III 式新期並行、10 段階：加曾利 E IV 式期並行を示す。

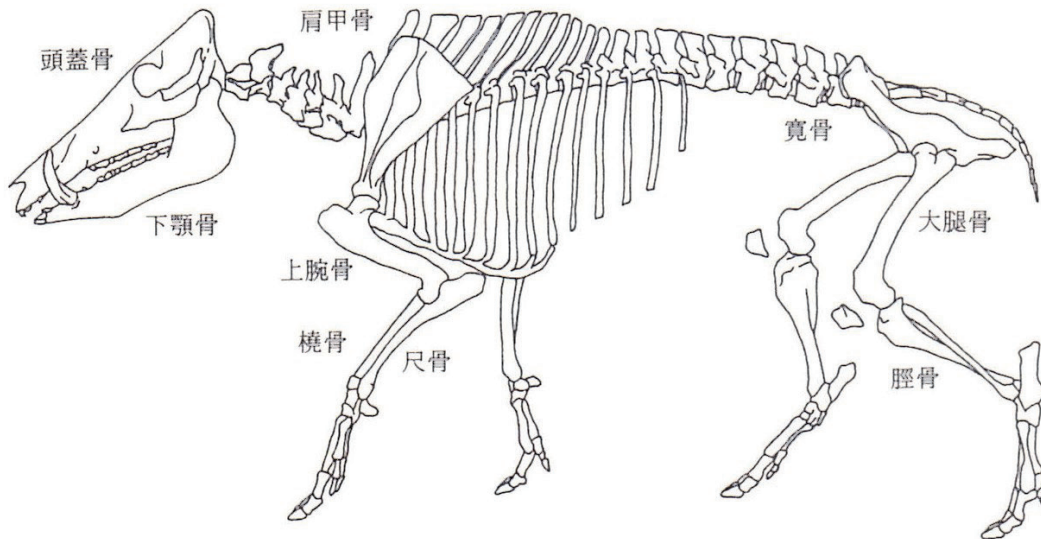


図 11 イノシシの主要部位 (西本・松井 1999)